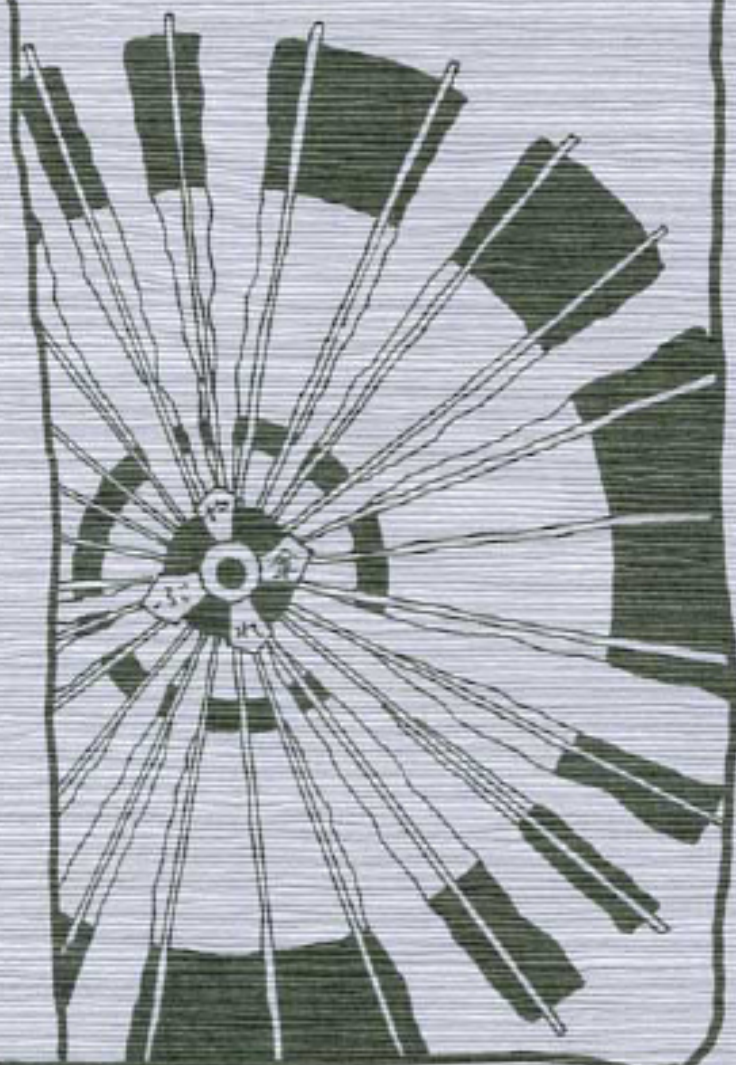


# やぶれ傘



五十四号

二〇二〇年六月

あたたかや蛇籠の網目水にゆれ	根橋宏次
春昼を刻む屋外大時計	大島英昭
鶯や間伐材の貯木場	廣瀬雅男
バス停のトタンの壁に日あたたか	藤井美晴
腰降ろすだけのふらこ揺れ易し	きくちきみえ
つんつんと光を受けて猫柳	秋葉貞子
庭の石ひかる三つ四つ春灯	白石正躬
囀りの残れる一樹日照雨降る	安藤久美子
お茶の木の畝間にかがむ蕨摘み	天野美登里
ポタージュの刻みパセリの色に春	丑久保勲
綿飴屋灯を点しけり遅桜	瀬島酒望
残されし長き一畝葱坊主	渡邊孝彦
潮の香のホームに降りる春の昼	國保八江
切株の年輪にほふ春の雨	久世孝雄
花疲れ妻の足揉むこととなる	松村光典

抄 集 句 選 夫 紀 崎 大 傘 ぶ れ や

雪被る庭石円くなりにけり	有賀昌子
総持寺の百間廊下春寒し	橋本美代
春時雨「め」の字の絵馬の薬師堂	松本善一
対岸の宿までは舟水ぬるむ	松本正生
大寺の毛綱の束や涅槃西風	秋山信行
電車待つ少女の輪より卒業歌	岩藤礼子
紙雛を吊す漁船の操舵室	小川 滋
鰐口の音のやはらかき花の寺	奥田温子
春の野やざらりと貰ふ金平糖	菊地葉子
朝のめしちりめんじやこの突つ張つて	忽那みさ子
花冷や孔雀は羽を閉ぢしまま	齋藤朋子
連翹や道に出てゐる倭鶏四五羽	齋藤 博
負鶏の血豆を潰す男あり	眞田忠雄
花のなか吉野の一夜あけにけり	鈴木昌子
山門に触るるばかりの辛夷かな	都丸スミ代

種  
俵

大崎紀夫

日の没りしあとを雲ゆく山ざくら  
水底に日の斑をまとふ種俵  
釣り人のふたり花見の土手の下  
湖を這ひ山を這ふ雲八重桜  
糠雨に夕日差しくる初燕

落口に小魚群るる諸葛菜

枕木を春の夜の雨濡らしけり

波洗ふ礁は近し花大根

斎場は山ふところに霞みけり

春風のなかに揚げ幕揚がりけり

濃山吹養魚場より水は田に

湖に出る道にぎしぎし踏まれたる

庭の石

白石正躬

舟べりにわが影のおち水温む  
土ならず腰を伸ばすや鳥雲に  
山笑ふ遠くの富士山は雲の間に  
風にのり蝶々往つてしまひけり  
鷹鳩と化して鴉の騒ぎをり  
山寺は霞のなかに幟旗  
庭の石ひかる三つ四つ春灯  
うるむ空雲雀の声を落としくる  
川べりは飛燕の空となりにけり  
通夜の灯のほそぼそ揺らぎ暮の春

日照雨

安藤久美子

花房は馬酔木に雨の匂ひけり  
囀りの残れる一樹日照雨降る  
春の雪みせて玻璃戸の震へやや  
びーどろの細工の刻ときを春時雨  
とび越ゆる蜷の小川の細にごり  
うららかや時計廻りに池畔ゆき  
蘆の芽の尖りに風の寄り来たる  
ビオロンの音は此処まで虻の昼  
芽吹き急水面ふれゆく風の出で  
白藤の影はやうやう砂場まで

蕨 摘 み

天野美登里

玉砂利を敷いて馬酔木の垣根かな  
雨粒の残る蓬を摘みにけり  
春昼の公園に降る天気雨  
お茶の木の畝間にかがむ蕨摘み  
石段の下の茶房や雪柳  
積み置きし鉢にはこべら咲きにけり  
目秤で量る麦味噌浅蜷汁  
山葵田の底に小石のひかりかな  
蒲公英の絮吹き飛ばす遊びかな  
春深む竿竹売りの声のして

パセリ

丑久保勲

ポタージユの刻みパセリの色に春  
春の雨あがりしあとの土竜塚  
ミモザ咲く家へと足を向けにけり  
両の手にバケツとシヨベル花菜畑  
ドロップをひと粒口に青き踏む  
バス停をはるかに畦の青き踏む  
風なりに草なびきゐる春田かな  
門前の下乗の札や朝桜  
道ふさぐ桜の枝を潜りけり  
店先のパスタのメニュー桜



遅 桜

瀬島洒望

早春の能登四句

雪解水とどむる能登の棚田かな  
海にむく塗師工房の紙雛  
浅春や田に真向かひの駐在所  
魚捌く一部始終を春の鳶  
春北風や鍵束提げしガードマン  
門口に白木蓮咲かせK氏宅  
リハビリの専門医院辛夷咲く  
巡查来てをり鶯の鳴く庭に  
綿飴屋灯を点しけり遅桜  
鉢底を小石で塞ぎダリア植う

葱坊主

渡邊孝彦

ぶらんこの子等振れ幅を競ひ合ふ  
弁財天鳥居の前に椿落つ  
石段は通行禁止春の苔  
菓箋の目薬もらふ鳥ぐもり  
張り綱の帆柱を打つ春あらし  
お彼岸に空也最中を母と食ふ  
客殿を工事する音いたちぐさ  
線香の香る背戸道初桜  
鶯の音は崖上の林より  
残されし長き一畝葱坊主

春の昼

國保八江

酔の匂ひ厨に満ちる雛の宵  
潮の香のホームに降りる春の昼  
梅白し軒端を過ぎる鳥のこゑ  
パン屋にはパン焼く匂ひ春の昼  
耕運機に道をゆづりて遠筑波  
胸高に袴を着けて卒業す  
艇と櫂杉葉の土手に干されけり  
バス停にバス待つ午後の花の雨  
花冷えの廊下軋ませ本堂へ  
山藤も日差しも午後に移りゆく

切株

久世孝雄

ゆつたりと下校のチャイム日脚伸ぶ  
鬼は外声ひそやかに十粒ほど  
切株の年輪にほふ春の雨  
整然と墓碑並ぶ丘春霞  
漕ぐ人のなきふらここの午後に入る  
花水木ふたごの眠る乳母車  
花疲れ松本楼のモンブラン  
耕運機漉き込んでゆく花の塵  
手足だらり流れに任す初蛙  
屋敷町手入れよろしき夏蜜柑

花疲れ

松村光典

三月やけふを限りの小学校  
スマトラ産コーヒー飲めば震止む  
大股で春本番へ歩き出す  
鼯かく猫に添ひ寝の春炬燵  
消防車わんと駆け去る春嵐  
窓越しに花冷えの街望むのみ  
東京は雷のち晴れて春うらら  
花疲れ妻の足揉むこととなる  
花びらの雨に流れてゆくところ  
風に散り雪に散りして花逝けり

庭 石

有賀昌子

ガジュマル生ふ島の日脚の伸びにけり  
機首をあげ冬夕焼けへ発ちにけり  
雪被る庭石円くなりけり  
茅葺の軒の氷柱に茅のいろ  
A T Mのかたへに置かれ紙雛  
万歩計つけて春野に入りけり  
風光る七歳の子の国語辞書  
恵那山の空を遙かに柳の芽  
此れやこの乙女の裸像陽炎ひて  
長閑けしやとときに小道の石を蹴り

萩原溪人

武蔵野の夜空は大きな斑雪

青き踏む「ママがいいの」と言ふ子供

山城を背に鶯の谷渡り

白酒や孫にまけずの赤ら顔

神楽坂の毘沙門天

毘沙門天の阿吽の虎に春日かな

春燈やピンクの窓のケアホーム

山笑ふラインくだりの水しぶき

橋本美代

総持寺の百間廊下春寒し

海風の時に強し吊るし雛

緋毛艶千し雛を納めけり

入学児結露の窓に名前前書く

花人の老いも若きも足湯かな

花筏の老ゆたふ先の船溜り

荒川の流れゆるやか花は葉に

## ◇ 7～8月の句会案内

月	日	時	句会名	会 場	連 絡 先
7月	2日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	2日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン	丑久保 勲
	5日(月)	PM7:00	ぎんなん会	浦和コミセン	丑久保 勲
	6日(火)	AM9:00	こなから会	戸田市中央公民館	大崎紀夫・WEP
	6日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン	瀬 島 孟
	17日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤 井 美 晴
	24日(土)	AM10:00	楽 天 会	戸田市中央公民館	廣 瀬 雅 男
	25日(日)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
	28日(水)	PM6:00	三 斗 会	WEP俳句教室	丑久保勲・WEP
8月	2日(月)	PM7:00	ぎんなん会	浦和コミセン	丑久保 勲
	3日(火)	AM9:00	こなから会	戸田市中央公民館	大崎紀夫・WEP
	3日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン	瀬 島 孟
	6日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	6日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン	丑久保 勲
	15日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	さいたま市・見沼	丑久保 勲
	21日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤 井 美 晴
	22日(日)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
	25日(水)	PM6:00	三 斗 会	WEP俳句教室	丑久保勲・WEP
	28日(土)	AM10:00	楽 天 会	戸田市中央公民館	廣 瀬 雅 男

(注) 8月15日(日)の吟行。集合は10時。JR京浜東北線北浦和駅改札口。

(近所の方はバス北浦和・宮下線山中橋停留所)。吟行地：見沼代用水東縁と周辺の農園。用水縁は桜並木で涼しい、農園は木陰はないが短時間降りることが可能。句会場：浦和駅東口 パルコ10階 浦和コミセン第3集会室。

◎連絡先 瀬 島 孟 ☎ 048-862-2757 藤 井 美 晴 ☎ 0422-55-2733  
 大 島 英 昭 ☎ 048-592-5041 WEP編集室 ☎ 03-5368-1870  
 廣 瀬 雅 男 ☎ 048-443-7522 浦和コミセン ☎ 048-887-6565  
 丑久保 勲 ☎ 048-853-3856 WEP俳句教室 WEP編集室へ